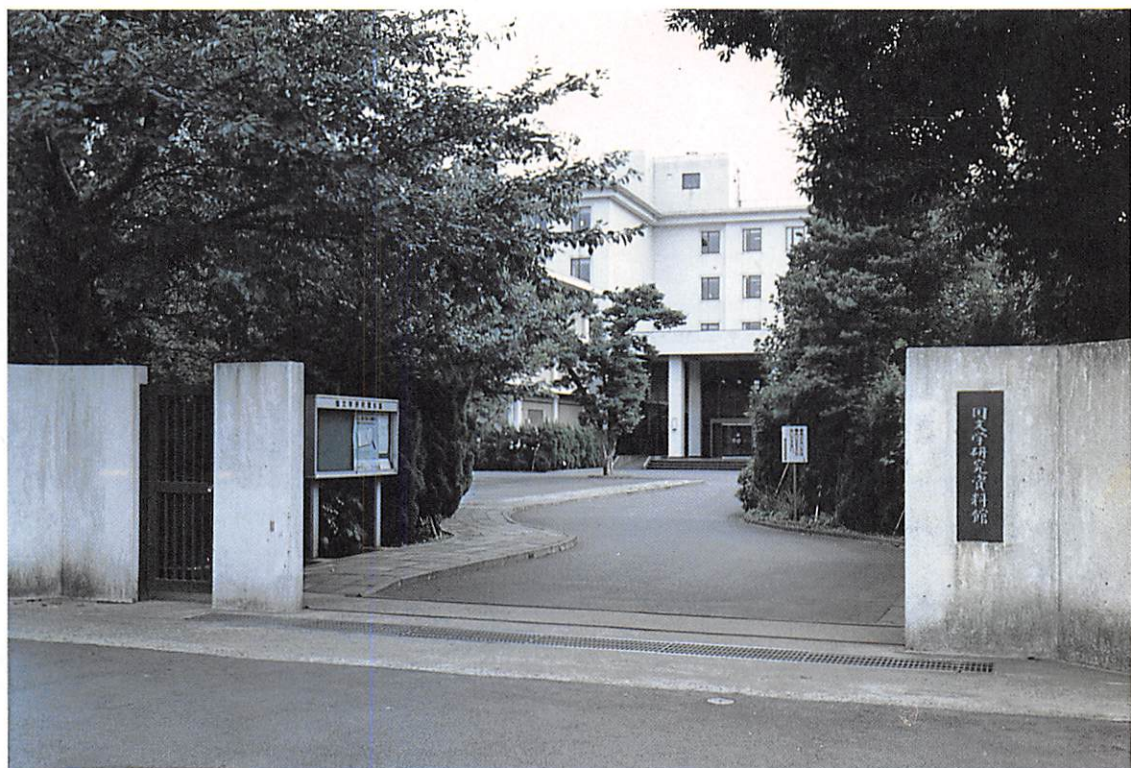


国文学研究資料館の20年

平成4年

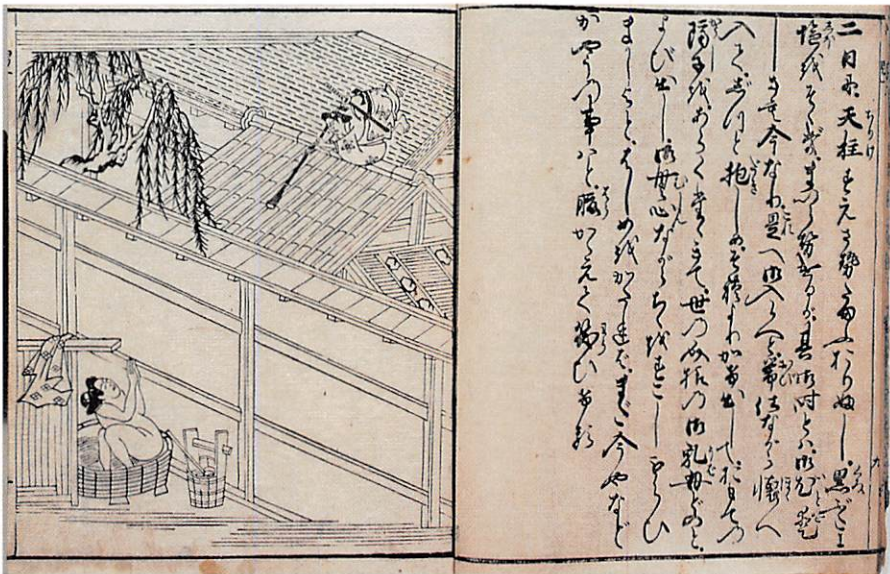
国文学研究資料館



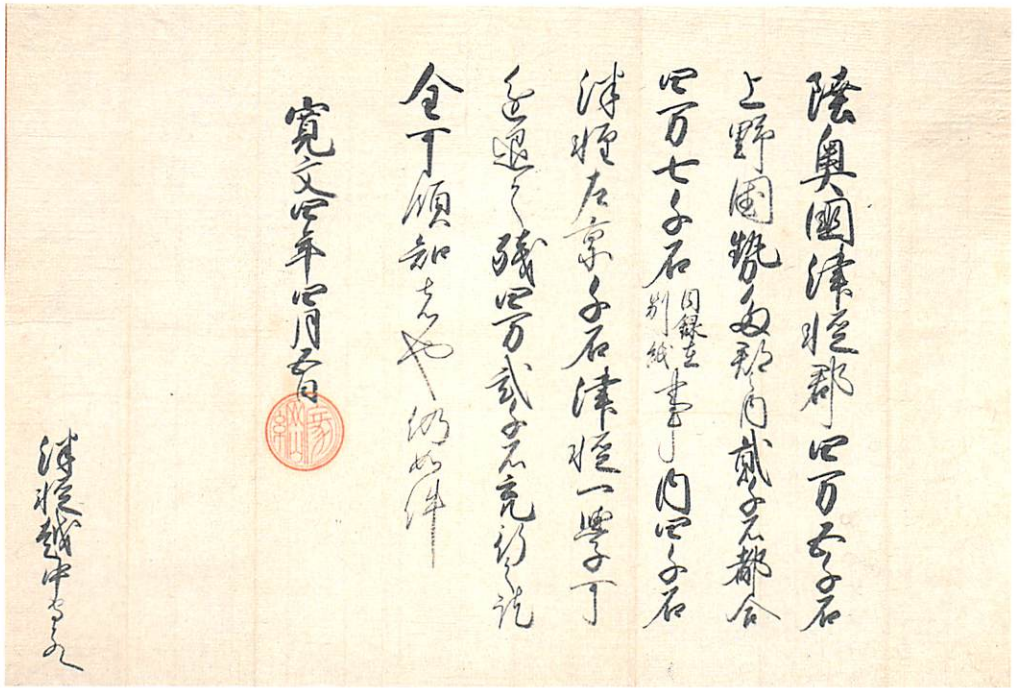
国文学研究資料館正面



曾我物語（元和寛永頃古活字組合絵入）



好色一代男（天和二年刊 初刷本）



徳川家綱領知朱印状



舶来和物戲道具調法くらべ

はじめに

本年は当館設立後20年に当たる。この機会に『国文学研究資料館の20年』と題する冊子を作ることにした。

当館はすでに昭和57年に『十年の歩み』を刊行している。それと内容の重複する当初の10年をどうするか、今回は見送って30年で出してもよいのではないか、との意見もあった。一方、資料類はせめて10年単位で整理しておかないと、構成員が次々と交替する機関の常として、後になるとわからなくなってしまうことが起きる、という意見もあり、協議の結果、資料編を主とする形で刊行することになったのである。

したがって、Iの国文学研究資料館の「この10年」の概要という概説編は簡略をむねとした。「管理運営の概況」に続けて各部館ごとに記し、「共同研究など」を添えた。原則として、創立後の10年についても簡単に触れて連関を図った後、この10年間のことを記述した。他に比して研究情報部のページ数が多いのは、この部の4室がそれぞれの業務を持っていて多様であることや、この10年間において新たに発展拡充した分野を含んでいるからである。

IIの資料編の各項目の選定及び配列は、『十年の歩み』に準拠することとして対照の便を図った。ただし、〈事業〉から通し番号を付けたので番号は一致していないし、新項目もある。また、『十年の歩み』との重複を避けて「この10年」のみを記すことに努めたが、切り離しにくいものもあり、20年を通じてのほうが便利なものもあるので、あまりこだわらなかった。そのため、20年を通じてと、この10年と、両様になったが、符号を付けて、両者を区別した。

IIIとして、略年表を付した。

この10年間、引き続き資料の調査・収集は着々と進み、創立以来20年間の通計で、調査点数は約19万点、収集点数は約11万点に達した。海外資料の調査も順調に進行しており、また、松宇文庫（昭和60・61年度）など、特殊文庫の若干について調査や収集を行うことができた。国際日本文学研究会の第10回（昭和61年11月）には、加藤周一、ドナルド・キーン、小西甚一、芳賀徹（司会）の諸氏によるシンポジウム「日本文学史について」を行って好評であった。データベースオンラインサービスも、（館蔵）マイクロ資料目録・（館蔵）和古書目録（ともに昭和62年4月より）や国文学論文目録（平成4年4月より）を開始した。『古典籍総合目録』（3巻。平成2年2月、3月）を岩波書店より刊行し、また、廣瀬淡窓・青邨関係資料（平成3年4月）などの寄贈を受け、田安德川家資料（平成3年4月）などの寄託も受けている。史料館では、近世史料取扱講習会を史料管理学研修会と改称して、長期研修・短期研修の二つのコースを実施するようになったし（昭和63年度より）、また、『史料館叢書』11冊（昭和54年～63年）を東京大学出版会より、『近世・近代史料目録総覧』（平成4年4月）を三省堂より刊行した。共同研究は、「連歌資料のコンピュータ処理」の

研究によって、連歌目録データベースを作り上げたし、昭和60年度より始めた公募による研究も、地味ながら成果を挙げつつある。また、毎年一人ずつ招聘している外国人研究員を中心とする共同研究も、そのいくつかについては、『終わりの美学』（平成2年3月）のように、その成果を論文集の形で明治書院より刊行している。

本冊子は部館ごとに概要を記した。これは便宜に従ったもので、業務としては相互に関連のあることが多い。マイクロ資料目録を例にとれば、目録を作成して所収のマイクロフィルムを閲覧に供するのは整理閲覧部であるが、整理するためのコンピュータのシステムを開発し維持しているのは研究情報部であり、それらのマイクロ資料を図書館・文庫等において調査し、収集しているのは文献資料部である。このように各部は協力して事業を行っている。なお、史料館においては、昨平成3年11月に「史料館の歩み四十年」を刊行した。

もとより、当館の業務の中心は、資料を調査・研究して収集・保存し、これを研究者一般の閲覧に供することや、研究情報を整理して学界に提供することである。さらには、コンピュータによる研究支援の道を情報処理学者の協力を得ながら開発してゆくことが期待されている。『館蔵マイクロ資料目録』（縮刷版は笠間書院刊）、『館蔵逐次刊行物目録』、『国文学年鑑』（至文堂刊）、『史料館所蔵史料目録』などを毎年刊行しており、整理・閲覧などの業務、コンピュータ関係の業務、庶務・会計の管理業務、などに事務官及び補佐員約60名が精励し、国文学関係三部及び史料館の30余名の教官は、業務と研究とを両立させるという困難を克服しつつ、共同研究やそれぞれの専攻分野の研究にも励んでいる。これは20年一貫して変わらない。今後も着実にその歩みを続けるであろう。一層の御支援をお願いする次第である。

最後に、本務のかたわら、短時日に本冊子をまとめ上げた編集委員会（委員長 松野陽一教授）の諸氏、資料を整理して執筆に当たった館員一同の努力に対して感謝の意を表する。

平成4年10月

国文学研究資料館長

小山弘志

目次

口絵

はじめに

I 国文学研究資料館の「この10年」の概要	1
1 管理運営の概要	1
2 各部館の事業の概要	5
(1) 文献資料部	5
ア 20年の概要	5
イ この10年の概要	6
(ア) 海外資料の調査・収集	6
(イ) 特殊文庫の調査・収集	8
(ウ) 特定研究及び科研費による研究	10
(2) 研究情報部	12
ア 20年の概要	12
イ この10年の各室の概要	12
(ア) 情報資料室	12
① 国際日本文学研究集会の開催	13
② 国文学研究資料館報の発行	14
③ 新聞情報の収集・整理	14
(イ) 情報分析室	14
① 国文学年鑑の編集作業	14
② 国文学研究資料館紀要の刊行	15
(ウ) データベース室	18
① 国文学論文目録データベースの構築	18
② 国文学データベース研究集会の開催	19
(エ) 情報処理室	19
① 情報処理システムの更新	19
② システム開発	21
③ 情報資源	22
④ 対外活動等	24

(3) 整理閲覧部	26
ア 創立後10年の概要	26
イ この10年の概要	27
(ア) マイクロ資料の整理と活用	27
(イ) 古典籍総合目録作成作業	28
(ウ) 古典作品典拠ファイル作成作業	29
(4) 史料館	31
ア 創設以来の概要	31
イ 事業の概要	32
(ア) 史料の収集と整理	32
(イ) 史料の閲覧利用サービス	32
(ウ) 所蔵史料の翻刻・刊行	33
(エ) 史料学・史料管理学研究活動	33
(オ) 史料管理学研修会の開催	34
(カ) 史料所在情報収集と公開	35
3 共同研究など	37
II 資料編	39
<創立十周年記念式典における式辞、祝辞>	43
<事業>	51
<名簿>	152
<参考法令(抄)>	179
III 略年表	187

あとがき

国文学研究資料館の20年

平成4年11月6日 発行

編集兼 国文学研究資料館
発行者 東京都品川区豊町 1-16-10

印刷者 陸美マイクロ株式会社
東京都江東区木場 6-12-5